

4. 野尻(3)遺跡出土の刀装具について

はじめに

今回の発掘調査では、住居跡をはじめとする平安時代の多くの遺構を検出し、多数の遺物が出土した。このなかでも、第3号円形周溝から出土した刀装具1点は、県内や東日本においても類例が少ない資料であることから、一項を設けて考察するものとする。

出土刀装具について

(1) 出土状況

調査区のほぼ中央に位置する第3号円形周溝の遺構確認面から出土した。遺構の南西、第20号住居跡との重複部分に当たる。遺構確認作業中にみつき、周囲からは、これに関連すると思われる遺物の出土はなく、単独の出土である。出土地点から、遺物の所属について問題となるが、第3号円形周溝は、第20号住居跡を壊す形で構築されていること、出土地点の高さが周溝覆土上面であることを踏まえると、本遺構に伴う可能性が高い。遺構周囲における古代以外の遺構の重複、攪乱等がみられないことから、後世の遺物混入の可能性は低い状況である。

本遺構の周溝覆土中に白頭山苦小牧火山灰と推定される火山灰の自然堆積がみられることから、遺構の年代は少なくとも火山灰降下以前である。周溝覆土上面からの出土は、周溝内側に存在したと推定される主体部あるいは盛土から落下した可能性がある。

(2) 観察(図146-1)

大きさは、縦4.3、横4.2、側面幅1.6cm、厚さは、最も厚い先端部中央で5mm、ほかは2mmほどである。重さは、約40gである。形態は、縦と横が、ほぼ同じであり、隅丸の正方形に近い形である。上部に向かうにしたがって僅かに幅が狭くなり、栗頭のように中央先端部がやや突出する。両面ともに蝶が羽を広げたような形をした透かしとその下に手貫緒(てぬきのお)用と思われる径約7mmの円形の穴が開いている(註1)。この透かしは、高松塚古墳出土遺物や正倉院御物などに辿ることが可能な唐様大刀の系譜にある柄頭に手貫緒金具が一体になった結果と言える。手貫緒金具は、六葉の花文(蓮花文か)を表している。また、柄頭を上から見ると側面の幅が異なっており、一方が幅広に作られている。幅広の方が棟側、狭い方が刃側に対応するものとするが、本来的には柄を握るための工夫により幅が異なるものと考えられる(註2)。上部の両隅には、細い刻みが両面にかけて施されている。出土資料は、比較的大型で手貫緒孔を有しており、一般的に柄頭金具は鞘尻金具よりも大きいことを考え合わせると柄頭金具と判断できる。

材質は、肉眼観察では、全体が緑青で覆われており、銅製とわかる。色調は、緑灰または暗緑灰色を呈する。村上氏の分析によって(銅-鉛-ヒ素)系合金との結果を得た。

(3) 製作技法について

肉眼による観察では、鍛造か鑄造か不明であったが、村上氏の顕微鏡による詳細な観察から鑄造製であることが判明した。

考察

(1) 類例(出土資料と伝世資料)

出土資料の形態的な特徴を踏まえた上で、類似する資料との比較検討を行う。今日、目にすることのできる刀の資料は、発掘調査で出土した考古資料と寺社などに伝わる伝世資料に大きく分けられるが、当遺跡出土の類似資料―手貫緒穴金具と柄頭金具本体が一体となった柄頭(以下一体型柄頭)は、大きく分けると北海道を除く東日本の出土遺物、北海道近世アイヌ墓出土遺物、主に近畿地方の神社に伝わる宝物(伝世品)となる。刀に関する出土資料は、古墳出土の刀剣類を除けば、拵えの一部など部分的な出土が多いと言える。一方、伝世品は慶長以前の古刀の内、平安以前についてはわずかな数しか知られておらず、鎌倉になってやや増える程度である。拵えを含め刀剣資料は、各地に残されているが、本遺跡出土品に類似する資料は少ない。

A 出土資料 一体型柄頭の類例は、図1・表1のとおりである。やや形態の異なるものも含まれるが管見では13例で、北海道近世アイヌ墓出土のものを除くと9例である。分布は、北海道4例、青森県1例、秋田2例などすべて東日本からの出土で、4点が鉄製のほか銅製である。

2は、本遺跡のものより小さく、横長の形態を呈す。3は、片方のみが本体と一体で左右非対称であり、柄反に合わせたような形態となっている。10世紀初頭を下限とする年代が与えられており、一体型の初源に位置づけられている(註3)。4は、大きさや形態ともに当遺跡出土のものに最も近い形態である。やや頭部に丸みをもち、切り込みは見られない。出土した住居の年代観は、9世紀第四半期から10世紀第一四半期である。

5は、他の出土遺物から中世の所産と思われ、やや小さめで鞘尻と考えられる。大きく歪んでおり柄反の進んだ形態である。6は、やや縦長であり、上部はやや突出する。透かし部分や手貫緒部分の形は明確でない。7は、鉄製でやや縦に長く細い作りになっている。8は、唐草文様を毛彫りで表現した珍しいものであるが、縦にやや長く左右非対称で柄反に合わせた形態である。9と10は、鉄製で手貫緒金具あるいは目貫の部分を一方向の覆輪に被せることによって創出している。ともに縦に長い形態である。

B 近世アイヌ墓等出土資料 12・13は、近世アイヌ墓に副葬されたものであり、蝦夷刀と言われる儀礼用の太刀と考えられている。形態的には、本遺跡資料に類似するが、出土遺構の年代に大きな隔たりがあり、現時点では分けて考える必要がある。この種の太刀は、長期間の伝世も考えられることなどから、現状では編年研究の限界が言われている(註4)。しかしながら、近世アイヌ墓出土の太刀の拵えのなかには、中世に遡る資料も出土しており、この種の一体型柄頭においても時期的に遡る可能性も残される(註5)。現段階では、Ta-a層(1739年上限)などの複数の降下火山灰から、17世紀から18世紀までの各年代が与えられている。4点とも隅丸の方形を呈し、幅もほぼ均一なものである。14は、丸みもなく他に比べて縦に長い形態である。このほかにオサツ1遺跡にも類例がみられる。

C 伝世資料 一体型の柄頭金具は、主に神社に奉納された太刀にみられる。分布は、旧所在地を含めると近畿地方を中心に西日本に多い。ここでは15例を挙げた(表2)。このなかでも鎌倉時代に盛行した兵庫鎖太刀は8例で、この太刀様式と一体型の柄頭との関係が強いことがわかる。重要資料であるためその全てを実際に目にし、手に取ることが困難であるため、実見することができた伝世資料①

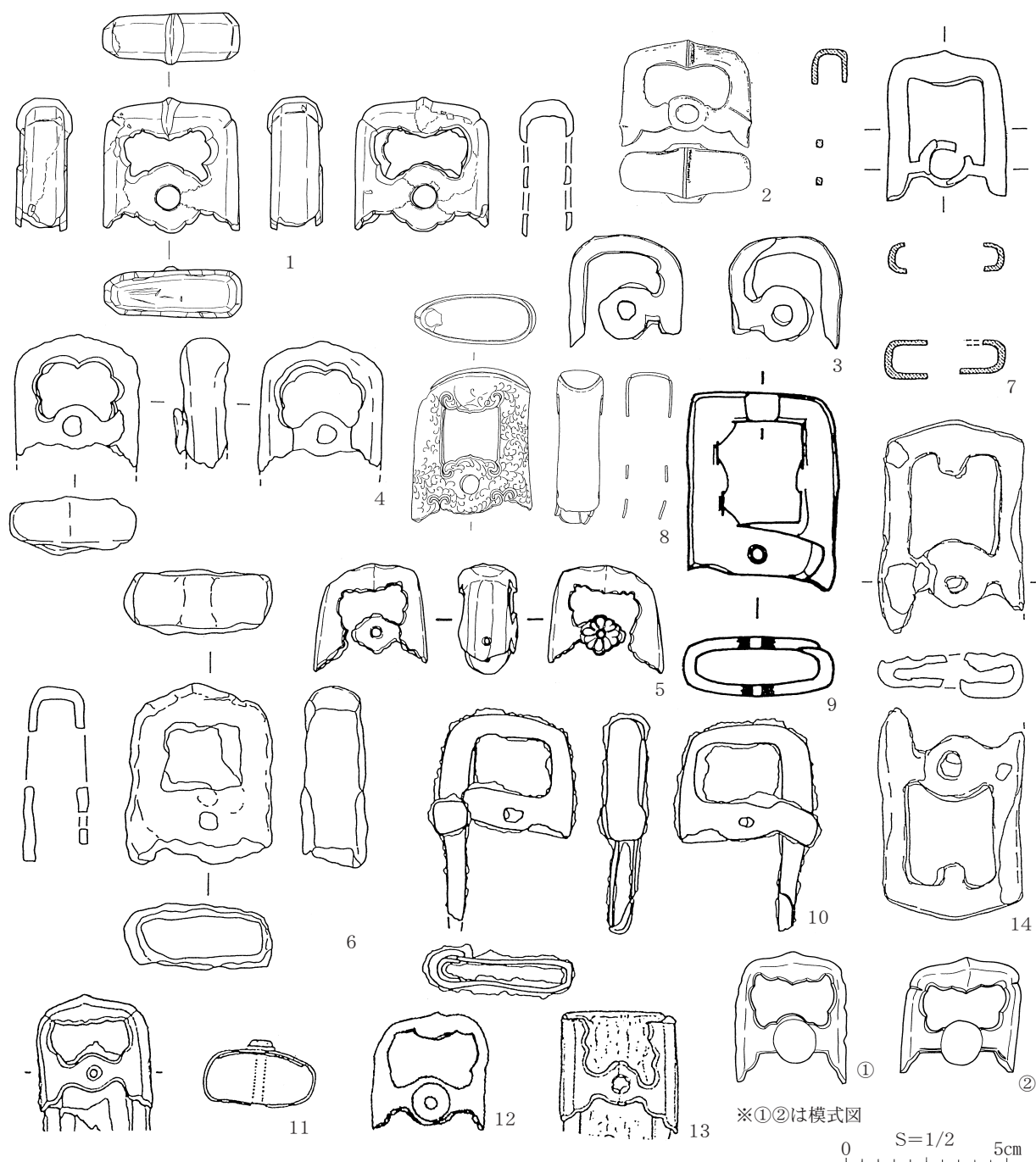


図146 本遺跡出土柄頭金具とその類例

表1 本体と手貫緒孔金具が一体になった柄頭金具（青金）出土資料一覧

図番号	出土遺跡	出土遺構・出土層位	大きさ(縦・横・奥行)cm・重さg	材質	年代	文献
1	本遺跡	第3号円形周溝確認面	4.3・4.2・1.6・40	銅	平安時代（9C後半～10C前半）	—
2	日光男体山山頂遺跡（栃木県）	I トレンチ	3.4・4.1・1.8・—	銅	平安時代（10C初頭か）	1
3	弘田柵跡（秋田県）	SX909焼土遺構炭化物層中	3.5・3.4・1.3・—	銅	平安時代（9C第4四半期～10C第1四半期）	2
4	奥谷遺跡（茨城県）	第41号住居跡覆土中層	4.1・3.9・1.9・17.2	青銅	中世（鎌倉後期か）	3
5	高瀬館跡（秋田県）	SK01	3.4・3.5・1.8・—	銅	平安時代（9C後半～10C前半）	4
6	岩ノ沢平遺跡（青森県）	B区第72号住居跡覆土	5.6・4.5・2.0・—	鉄	平安時代（9世紀中頃）	5
7	武蔵国府（東京都）	M-50-SI98	4.8・3.8・1.2・—	鉄	平安時代（10世紀中頃）	6
8	前田遺跡（長野県）	遺構外（き-11グリッド）	4.8・3.7・1.5・—	銅	平安時代（9世紀前半か）	7
9	南宮遺跡（長野県）	KSB12（住居跡）	—	鉄	近世（1739年以前）	8
10	李平下安原遺跡（青森県）	第20号住居床面	7.1・4.8・1.2・21.7	銅	近世（1663年以前）	9
11	遠矢第2チャシ跡遺跡（北海道）	遺構外（L-18区Ⅲ層）	3.6・3.5・1.0・—	銅か	近世（18世紀前後か）	10
12	有珠オヤコツ遺跡（北海道）	I号配石墓	2.6・2.7・1.8・—	—	—	11
13	入舟遺跡（北海道）	GP-13	3.6・3.6・2.0・—	—	—	12
14	オサツ2遺跡（北海道）	土坑IP35	6.6・4.5・1.4・—	—	—	13

と②（図146①・②）を奉納太刀の典型例として比較を行う。伝世資料は、形態的に類似するが、異なる点も多い。まず、大きさは当遺跡のものより小さく、幅としては、7～8mmの違いであるが、全体として見るとより小型の印象を受ける。一方、厚さは、大きさに対して厚く重厚感がある。材質は、銀地（鍍金）である。実戦用ではなく奉納太刀だけに多くの装飾が施されている。一方、共通する部分は、一体型の形態であり、柄の反りに合わせる形でやや歪み、側面幅も刀の棟側が厚くなっていることである。これら伝世資料の個々の特徴は、奉納太刀としての特殊性にあり、美術的価値の高い優品として、多くが国宝・重文などの文化財指定を受ける。その意味で出土資料との単純な比較はできないものと考えられるが、刀装の変遷過程において時代の特徴を表す資料として参考となるものである。これらの伝世資料の性格と年代については、皇族や将軍家、あるいは有力氏族が武運長久を祈願したり、またその信仰として寺社へ奉納・寄進された太刀であり、平安時代末の12世紀末から南北朝・室町時代の14～15世紀にかけてみられ、その盛期は鎌倉時代の13世紀と考えられる。大山祇神社は山や川、戦いの神として尊崇を集めたが、三島大社との関係も深いとされ、両社への信仰が窺われる。

（2）位置づけ

A 一体型柄頭の年代

当遺跡出土資料は、周溝覆土に白頭山苦小牧火山灰が自然堆積することから、少なくとも降下年代である西暦936年頃よりも遡る。当遺跡の北隣に位置する野尻(2)遺跡は、円形周溝を主体とする遺跡であり、これらの円形周溝の分布から同一の遺跡として考えられる。野尻(2)遺跡の円形周溝の一部は9世紀前半の住居跡よりも新しいことが発掘調査で確かめられていることから、年代の上限は、この時期に求められる。ただ、円形周溝同士の重複による時期差や、南に向かって時期的に変遷する傾向を考慮すると本遺跡については、9世紀後半から10世紀前半の年代が推定できる。

他の類似する出土資料については、年代にばらつきがあり、遺構外からの出土など、年代決定を難しくしている。北海道出土の4点は、近世の遺構出土であり、現時点では分けて考える必要がある。日光男体山山頂遺跡出土の2は、竹節の意匠を施した優品であるが報告書のなかでは時期についての記述はない。形は、細工が細かく、凹凸があり、縦に対して横幅が広い点など比較的古手の様相を呈すが、ほかに類するものがみられない。また同遺跡Cトレンチからは、8世紀に遡るような銅製鍍金

表2 本体と手貫緒孔金具が一体になった柄頭金具（冑金）伝世資料一覧

番号	資料名称	所蔵	来歴・旧所蔵	大きさ（総長・柄長・鞘長cm）	材質	年代	備考
①	沃懸地群鳥文兵庫鎖太刀	東京国立博物館	上杉氏により三島大社に奉納	105.4・22.3・83.7	銀地鍍金	鎌倉（13世紀）	国宝
②	三鱗紋兵庫鎖太刀	東京国立博物館	北条氏により三島大社に奉納	104.1・20.7・83.9	銀地	鎌倉（13世紀）	重文
③	桜花文兵庫鎖太刀	東京国立博物館	徳川斉昭所用	112・25・86.8	銀地鍍金	江戸（19世紀）	
④	龍浜松文沈金長覆輪太刀	東京国立博物館	高野山天野社（丹生都比売神社）伝来	96.1・20.4・76.2	銅地鍍金	南北朝～室町（14～15世紀）	
⑤	黒漆沈金長覆輪太刀	個人蔵	高野山天野社（丹生都比売神社）伝来	93.0・―・―		室町（14～15世紀）	重文
⑥	革手絵兵庫鎖太刀	和歌山県・丹生都比売神社		101.0・―・―	鍍金	鎌倉（13世紀）	国宝
⑦	競馬太刀（黒漆毛抜形太刀・尻鞘虎文）	東京国立博物館	手向山八幡宮	84.6・16.8・67.2		室町～江戸（15～18世紀）	
⑧	競馬太刀（黒漆毛抜形太刀・尻鞘豹文）	東京国立博物館	春日若宮八幡宮			室町～江戸（15～18世紀）	
⑨	牡丹文兵庫鎖太刀	広島県・厳島神社	将軍家奉納	82.3・17.4・65.0	鍍金	鎌倉（13～14世紀）	重文
⑩	牡丹文兵庫鎖太刀	広島県・厳島神社	将軍家奉納	93.5・―・―	鍍金	鎌倉（13～14世紀）	重文
⑪	沃懸地酢漿平文兵庫鎖太刀（二口）	奈良県・春日大社		95.4・―・―	銀地鍍金	鎌倉（13世紀）	国宝
⑫	牡丹唐草文兵庫鎖太刀	愛媛県・大山祇神社	伝護良親王奉納	105.0・―・―		14世紀	国宝
⑬	拵残欠	愛媛県・大山祇神社				13世紀	
⑭	黒漆小太刀銘「有次」	和歌山県・滝尻王子宮十郷神社	伝藤原清衡寄進		金銅	平安時代末期（12世紀）	重文
⑮	鶴丸文兵庫鎖太刀	愛知県・熱田神宮		36.3・―・―	金銅	永仁七年（1299）施入	重文

大きさは、基本的に報告書の記述を記すが、記述のないものについては実測図を計測した。伝世資料表中の「大きさ」は、太刀全体の大きさを示す。材質は、冑金のみを記す。

の鞘尻金物が出土しており、かなり古い時期のものも含まれていると考えられる。時期的に古いものとすれば一体型柄頭の初現となる可能性がある。払田柵跡出土の3は、10世紀初頭を下限とする年代が与えられているが、形態的にはやや異なるものである。奥谷遺跡出土の4は、形態的に最も類似するもので、出土住居の年代観は、9世紀第4四半期から10世紀第1四半期である。岩ノ沢平遺跡出土の6は、覆土中位に堆積する白頭山火山灰、出土遺物から住居の年代観は9世紀後半から10世紀前半である。

一体型の柄頭は、他の出土例から、およそ10世紀前半頃にみられ、当遺跡出土の年代観と、形態的に類似する奥谷遺跡例とは矛盾ないものと思われる。ただ、本遺跡、岩ノ沢平遺跡、奥谷遺跡は、出土遺構や出土遺物の年代、また柄頭自体の製作と廃棄の時期差を考慮に入れるならば、9世紀後半に遡る可能性も考えられる。

一方、奉納太刀にみられる一体型柄頭の年代は、一番古いもので和歌山県・滝尻王子宫十郷神社に伝わる平安末期のものである。しかしながら、内8例が13～14世紀の鎌倉時代に位置づけられるもので、盛期は、この時期にある。一部、近世にもみられるがこれらは古式に倣ったものと考えられる。

このように出土資料と奉納太刀との間には、2～300年間の隔たりがあり、両者の間に系統的な繋がりがあるものか不明であるが、9世紀後半から10世紀前半頃、この種の柄頭が出現し、その後、12世紀末から13・14世紀の奉納太刀（兵庫鎖太刀）の柄頭として採用され、流行したとみられる。

B 一体型柄頭の系譜と変化

次に形態的な位置づけを行うために、その変化過程について考えてみたい。ここに示した一体型柄頭の多くが、形態的特徴から、唐様大刀（註6）にみられる心葉形柄頭の系譜にある資料と思われる。この心葉形柄頭は、7世紀後半から8世紀にかけての高松塚古墳出土品や正倉院などのものが初現として知られている。当遺跡出土資料で言えば、柄頭先端の栗頭状の鎬筋や肩部にみられる切り込み、また内側の透かし部分の突起は、初期の形態を踏襲するものとして理解できる。柄頭先端の鎬筋については、同時代の覆輪状柄頭においても見られる要素である。切り込みについては、覆輪状柄頭には見られず、心葉形の柄頭の特徴として挙げられる。初現期の心葉形柄頭の特徴は、鎬筋を立てたり、花文を表現したと思われる内外面の突起によって変化に富む形であること、全体に丸みを帯びること、先端に向かって逡減する点などであるが、一体型柄頭においては、丸みは失われ、方形を呈すようになり、逡減が顕著でなくなること、全体形が縦長になるものの出現などの変化が捉えられる。一体型の大きな特徴である手貫緒金具と本体との一体化であるが、心葉形の初期のものにはみられず、9世紀後半から10世紀前半段階で一体化が図られたものと思われる。一体化に至る過程は不明であるが、その原因が単なる流行によるものか、あるいは刀の形態や機能面に関わる変化なのかを検討する必要がある。また、一体型にみられる丸みが失われる点や縦長になるものの出現は、覆輪状柄頭の影響とみることもでき、心葉形柄頭に覆輪状柄頭の要素が加わって変化した可能性も考えられる。一体型柄頭の出土資料については、東日本に分布の中心があり、時期的にも奉納太刀や近世アイヌ墓出土遺物に先行する。湾刀への過渡期に現れる毛抜形太刀は、一般的に東北から北海道にかけて分布する蔵手刀から変化したものと理解されており、東日本において創始された太刀様式と考えられる。一体型柄頭においても、畿内を発信地とする唐様大刀の心葉形柄頭の影響を受け、変化の過程で創始されたものと現時点では理解できなくもない。ただ、この種の柄頭が材料を含めて何処でどのように製作され

たかを考えていかななくてはならない。

C 性格

出土資料14例の出土状況は、住居跡5・遺構外2・土坑2であるが、そのほかは墓や信仰遺跡、焼土遺構炭化物中など特殊な遺構から出土している。しかしながら、類例が少ないことから傾向を示す状況にないと考えられる。当遺跡の出土状況については、先に述べた通りであるが、平安時代の墓と考えられる円形周溝からの出土であり、副葬品の可能性がある。近世アイヌ墓出土資料は、儀礼用の太刀と考えられるが、北海道では中世の奉納太刀に類似する刀装も少ないながら出土しており、奉納太刀の影響も窺われるところである。当遺跡出土資料は、東日本から出土する一群に時期的にも形態的にも含めてよいと考えられるが、この種の柄頭金具を具す太刀が、実戦に用いるための太刀であるのか、儀礼的な太刀であるのか今後検討が必要な点である。

まとめ

本遺跡出土の柄頭金具について類例を集め、その位置づけを試みた。これらの類似資料を集めた結果、東日本の出土資料、近畿から西日本を中心とする神社伝世資料、北海道近世アイヌ墓等の出土資料に一体型金具がみられ、それらの検討と出土遺構の年代観から、本遺跡例を、およそ9世紀後半から10世紀前半に位置づけた。しかしながら、すべての類例を合わせても30例たらずであり、出土資料においては、出土状況の詳細や個々の年代についても明確に位置づけられているものも少ないのが現状である。また、材質や製作技法についての分析は、これまであまりなされて来なかったと指摘できる。このような製作面の分析については、銅の産出地や製品の製作地に関わる問題であり、北日本における非鉄金属製品の位置づけを行うためのひとつの方法と考えられる。その意味からも遺物の年代的な位置づけに止まることなく、どのように製作され、あるいはもたらされたものかなど、出土の意味づけを行うことが大きな課題である。北海道においては、近世アイヌ墓出土のなかに類似資料がみられるが、兵庫鎖太刀の拵えと思われる足金物等も少量出土しており、奉納太刀が所在する近畿・西日本、出土資料がみられる東日本とどのような関係のもとにもたらされたものかなども今後検討する必要がある。

末筆ながら、出土資料の位置づけや類例について、以下の多くの研究者のご教示を受けた。ここに記して感謝申し上げたい。

(山田)

池田宏（東京国立博物館）、岡安光彦、鈴木信（北海道埋蔵文化財センター）、瀧瀬芳之（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）、津野仁（栃木県埋蔵文化財センター）、橋本達也（鹿児島大学総合研究博物館）、村上隆（奈良文化財研究所）、森秀之（恵庭市教育委員会）（敬称略）

註1 津野氏の柄頭分類によるとこの種の穴を目貫としている。当遺跡出土資料においても目貫の可能性はあるが、断定できないため手貫緒金具を取り付けるための穴とした。（津野仁2005「毛抜形太刀の系譜」国学院大学考古学資料館紀要第21輯）

註2 側面幅の違いは、直接的には柄の握り幅で説明すべきとの橋本達也氏ご教示による。

註3 註1文献

註4 蝦夷刀の編年研究の限界について森氏は、「蝦夷刀の様式が日本刀や刀装具の工芸史上の時代区分を直ちには適用できない特殊な様相を示していること、年代の決定できる共伴例、層位例が少ないこと、比較的長期間の伝世が想定しうることなどの資料の特性・制約に起因していると思われる。」とする。（森秀之1998「近世アイヌ墓出土太刀について」『カリンバ2遺跡第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ地点』恵庭市教育委員会）

註5 余市町大浜中遺跡出土の足金物や兵庫鎖などは中世に遡る資料であり、奉納太刀との類似がみられる。また、近世アイヌ墓出土太刀は、比較的古い形態を残している傾向があるとの鈴木信氏からご教示をいただいた。

註6 「唐様大刀」の定義については、「唐大刀」の模倣とするものや唐様に和様を加わったとするものなどの見解があるが、「山形金や唐鏝の付く大刀」として広義に捉える津野氏に倣った。(津野仁2003「唐様大刀の展開」(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター研究紀要第11号)

資料掲載文献

- 1 日光二荒山神社 1963 『日光男体山 山頂遺跡発掘調査報告書』角川書店
- 2 秋田県教育委員会 1991 『払田柵跡－第84～87次調査概要－』
秋田県文化財調査報告書第216集
- 3 財団法人茨城県教育財団 1989 『一般国道6号線改築工事地内埋蔵文化財調査報告書
奥谷遺跡 小鶴遺跡(上)(下)』茨城教育財団文化財調査報告第50集
- 4 秋田県教育委員会 1987 『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－
高瀬館跡－』秋田県文化財調査報告書第153集
- 5 青森県教育委員会 2000 『岩ノ沢平遺跡』
- 6 府中市教育委員会 2001 『武蔵国府の調査』18－昭和58年度府中市内調査概報
- 7 佐久市教育委員会 1989 『前田遺跡(第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ)』
- 8 長野市教育委員会 2002 『南宮遺跡Ⅱ』
- 9 青森県教育委員会 1987 『李平下安原遺跡』
- 10 北海道教育委員会 1975 『遠矢第2チャシ跡遺跡調査報告書』
- 11 伊達市教育委員会 1993 『有珠オヤコツ遺跡・ポンマ遺跡』
- 12 余市町教育委員会 1999 『入舟遺跡における考古学的調査』
- 13 千歳市教育委員会 2002 『ユカンボシC2遺跡・オサツ2遺跡における考古学的調査』
千歳市文化財調査報告書XXVII

参考文献

- 梶原皇刀軒 1989 『図説日本刀用語辞典』
- 正倉院事務所編 1977 『正倉院の大刀外装』小学館
- 東京国立博物館 1997 『日本のかたな』特別展図録
- 東京国立博物館 1997 『東京国立博物館図版目録 刀装篇』
- 財団法人佐川美術館 2004 『国宝中尊寺展』図録
- 加島進編 1971 『刀装具』日本の美術64 至文堂
- 小笠原信夫 1994 『日本刀の掙』日本の美術332 至文堂
- 津野仁 2003 「唐様大刀の展開」『研究紀要』第11号
財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- ニューサイエンス社 2005 『特集律令期の刀剣から日本刀成立への道程』
考古学ジャーナルNo.532
- 八木光則 2005 「阿光坊古墳群と蝦夷の交流」『阿光坊古墳群シンポジウム資料集』